

平成19年度第2回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
中央水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2008年1月～6月)のポイント

海況

潮岬以東の黒潮は、1～3月はC型流路、4月以降はN型流路となる。

沿岸水温は、潮岬以西が「平年並み」～「高め」、潮岬～犬吠埼が「平年並み」～「低め」で暖水波及時に「高め」、伊豆諸島南部海域がC型流路時に「低め」基調、N型流路時に「高め」、鹿島灘～常磐南部海域が「平年並み」～「低め」で暖水波及時に「高め」となる。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、高め＝平年値+1.5℃程度、低め＝平年値-1.5℃程度

漁況(来遊量予測)

マサバ・ゴマサバ太平洋系群

1歳魚は前年を上回る。

全体としては下回る海域が多い。

マアジ太平洋系群

徳島以西で前年を下回る海域が多く、

和歌山以東で前年並み。

マイワシ太平洋系群

紀伊水道外域以西では前年を上回るか前年並み。

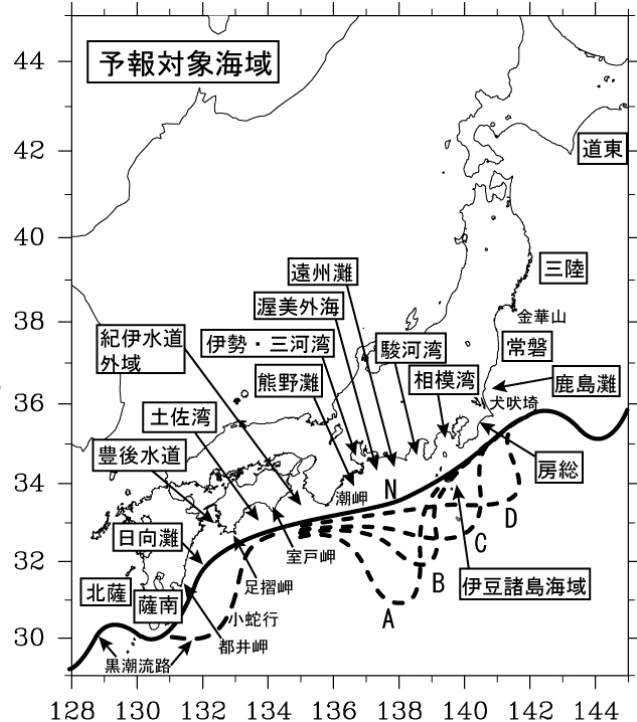
房総以北での2歳魚以上は前年を下回る。

カタクチイワシ太平洋系群

前年を下回る。

ウルメイワシ太平洋系群

前年並みか前年を上回る海域が多い。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：大隈、田中、佐藤

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 中央水産研究所 業務推進部

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://nrifs.fra.affrc.go.jp/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2008年1月～6月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと。）

◎潮岬以西

- ・薩南海域の黒潮北縁は、屋久島南付近での変動が多く、5月に接岸傾向、6月に離岸傾向となる。
- ・黒潮は、1～4月は都井岬沖～潮岬沖で接岸傾向で推移し、5月に都井岬沖で小蛇行が形成される。

◎潮岬以東

- ・黒潮は、1～3月はC型流路、4月以降はN型流路となる。
- ・野島埼沖の黒潮は、1～3月は離岸傾向、4月以降は接岸傾向となる。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・潮岬以西では、小蛇行の発生に伴って、日向灘～豊後水道外域～土佐湾では一時的に暖水が波及することがある。
- ・潮岬以東では、C型流路のとき、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島海域は概ね冷水域に入る。ただし、伊豆諸島南部海域は蛇行部の変動に伴って昇温と降温を繰り返す。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・房総沖の黒潮の離接岸に伴って黒潮系暖水が沿岸域へ波及することがある。また、一時的に親潮系冷水が差し込むことがある。

(4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は「平年並み」～「高め」で推移する。
- ・潮岬～犬吠埼は「平年並み」～「低め」で推移し、暖水波及時に「高め」となる。
- ・伊豆諸島南部海域はC型流路のとき「低め」基調、N型流路のとき「高め」で推移する。
- ・鹿島灘～常磐南部海域は「平年並み」～「低め」で推移し、暖水波及時に「高め」となる。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、高め＝平年値+1.5℃程度、低め＝平年値-1.5℃程度

経過（2007年8月～12月）（注：経過は図2を参照のこと。）

(1) 黒潮

- ・N型流路から7月下旬に小規模なB型流路へ移行した後、8月に蛇行の規模を拡大し、8月下旬にはC型流路となった。
- ・9月はC型流路で推移しながら、蛇行の規模を徐々に縮小した。
- ・10月前半、遠州灘沖の冷水域の一部が伊豆列島線の東へ抜け、一時的にW字状の流路となった。10月下旬にはN型流路へ移行した。
- ・11月前半に一時的に小規模なB型流路を経て、C型流路へ移行した。
- ・12月上旬、C型流路で推移した。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・8～9月、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置で推移した。
- ・10月～11月、黒潮北縁は接岸傾向で推移した。
- ・12月上旬、黒潮北縁は離岸傾向で推移した。

◎潮岬以西

- ・ 8 月、都井岬沖～潮岬沖では接岸傾向で推移した。
- ・ 9 月、中旬以降都井岬沖で離岸傾向となり小蛇行が形成された。足摺岬沖～潮岬沖では接岸傾向が継続した。
- ・ 10 月上旬～中旬、都井岬沖～足摺岬沖で「やや離岸」～「かなり離岸」となり小蛇行の規模が拡大した。
- ・ 10 月中旬～11 月上旬、小蛇行が小冷水渦に分裂しながら四国沖を東進した。
- ・ 10 月下旬～11 月中旬、潮岬沖では小冷水渦の通過に伴って短期的な離岸が見られた。
- ・ 11 月下旬～12 月上旬、都井岬沖では接岸傾向となった。

◎潮岬以東

- ・ 潮岬沖では概ね期間を通して接岸傾向が継続した。
- ・ 7 月下旬～8 月上旬、B 型流路に伴って、野島埼に著しく接岸し、相模湾は暖水で覆われた。遠州灘沿岸では弱い内側反流が形成された。
- ・ 9 月上旬、伊豆諸島北部海域と八丈島周辺は冷水に覆われた。
- ・ 9 月上旬～中旬、熊野灘～渥美外海の沖合に小暖水渦が発達し、中旬には駿河湾西部まで暖水が波及した。この小暖水渦は、10 月前半、規模を縮小しながら熊野灘から遠州灘にかけて暖水を波及した。
- ・ 10 月、八丈島周辺は暖水域に入り、中旬以降三宅島周辺も暖水域に入った。
- ・ 11 月前半、一時的な B 型流路に伴って伊豆諸島北部海域から外房海域が暖水に覆われた。
- ・ 11 月～12 月上旬、潮岬沖で黒潮が接岸したため、前線渦が頻繁に発生し、黒潮北縁域を次々と東へ移動した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 8 月、黒潮は房総半島に接岸し、その後、南偏した。沖合に冷水渦が形成され、この渦に巻き込まれた暖水が北方から沿岸域に波及した。
- ・ 9 月、黒潮の南偏は中旬以降解消した。海域全体に南下流が卓越し、北方から混合水が大規模に流入した。
- ・ 10 月、黒潮は離岸傾向で、犬吠埼沖を北東方向へ流去した。金華山沖の暖水塊由来の比較的暖かい海水が南下した。
- ・ 11 月、黒潮は 10 月下旬から南北変動し、その後はやや南偏して東方へ流去した。

現 況 (2007 年 12 月 12 日現在)

(1) 黒 潮

- ・ 黒潮は C 型流路で推移している。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁は屋久島付近に位置している。

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は都井岬沖～足摺岬沖で「接岸」、室戸岬沖で「やや離岸」、潮岬沖で「接岸」している。

◎潮岬以東

- ・ 黒潮は熊野灘沖を東へ流れ、遠州灘沖の 33° N 付近から南へ蛇行し、青ヶ島付近を通過し、141

° E 付近を北上し、犬吠埼沖で東へ流去している。黒潮北縁域には複数の前線渦があり、東へ移動している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮は犬吠埼沖で離岸していて、黒潮系暖水の影響は少ない。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に従った。

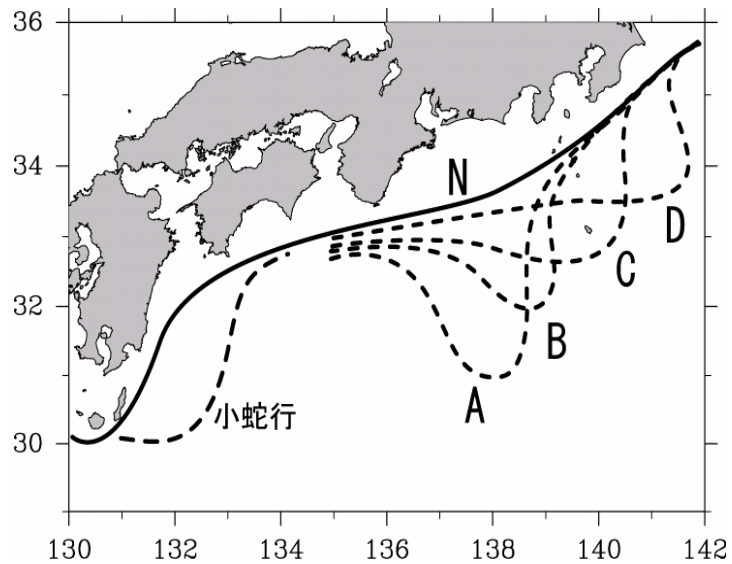


図1 黒潮流型の分類

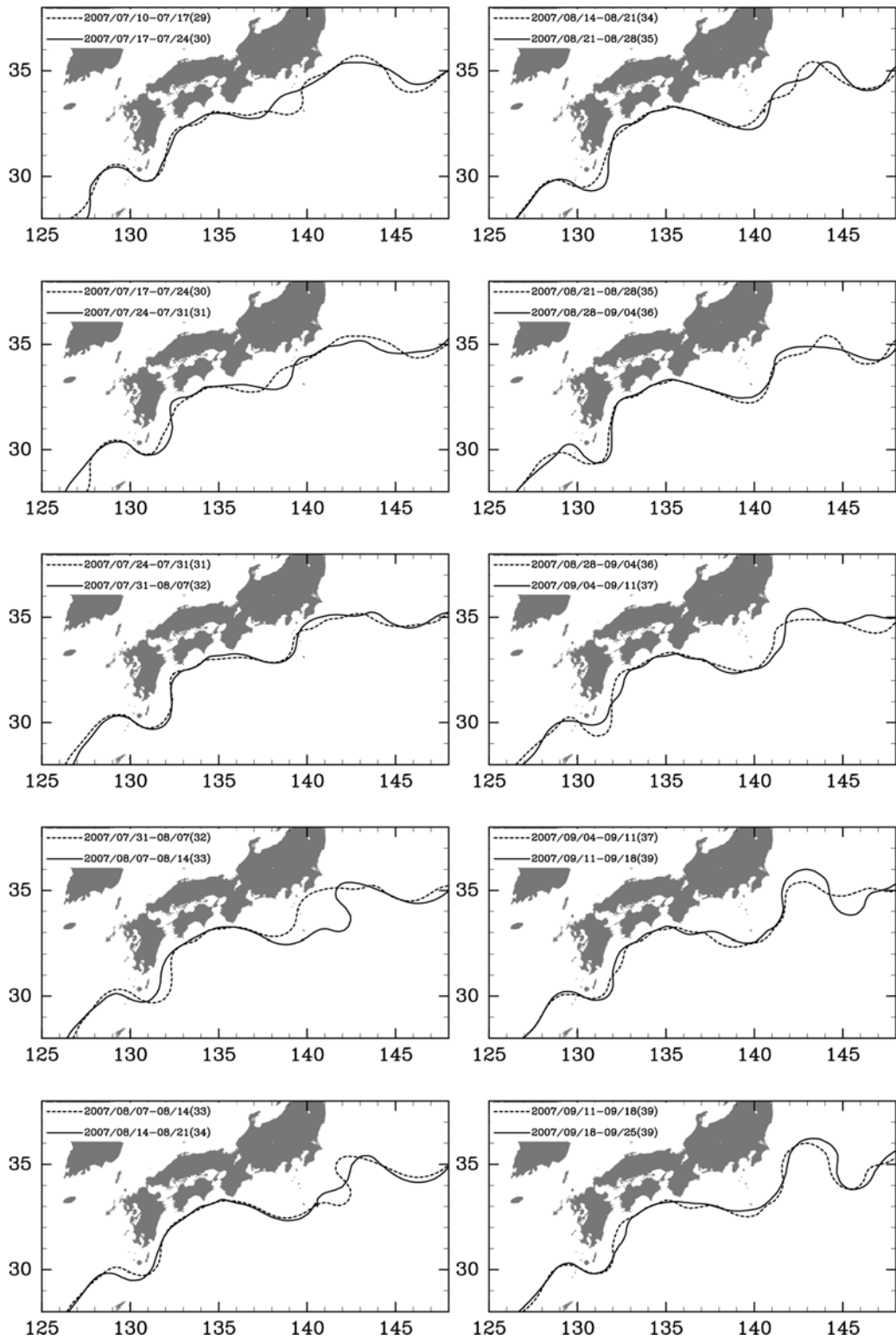


図 2a 黒潮流軸のパターン
(2007年7月~12月, 海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

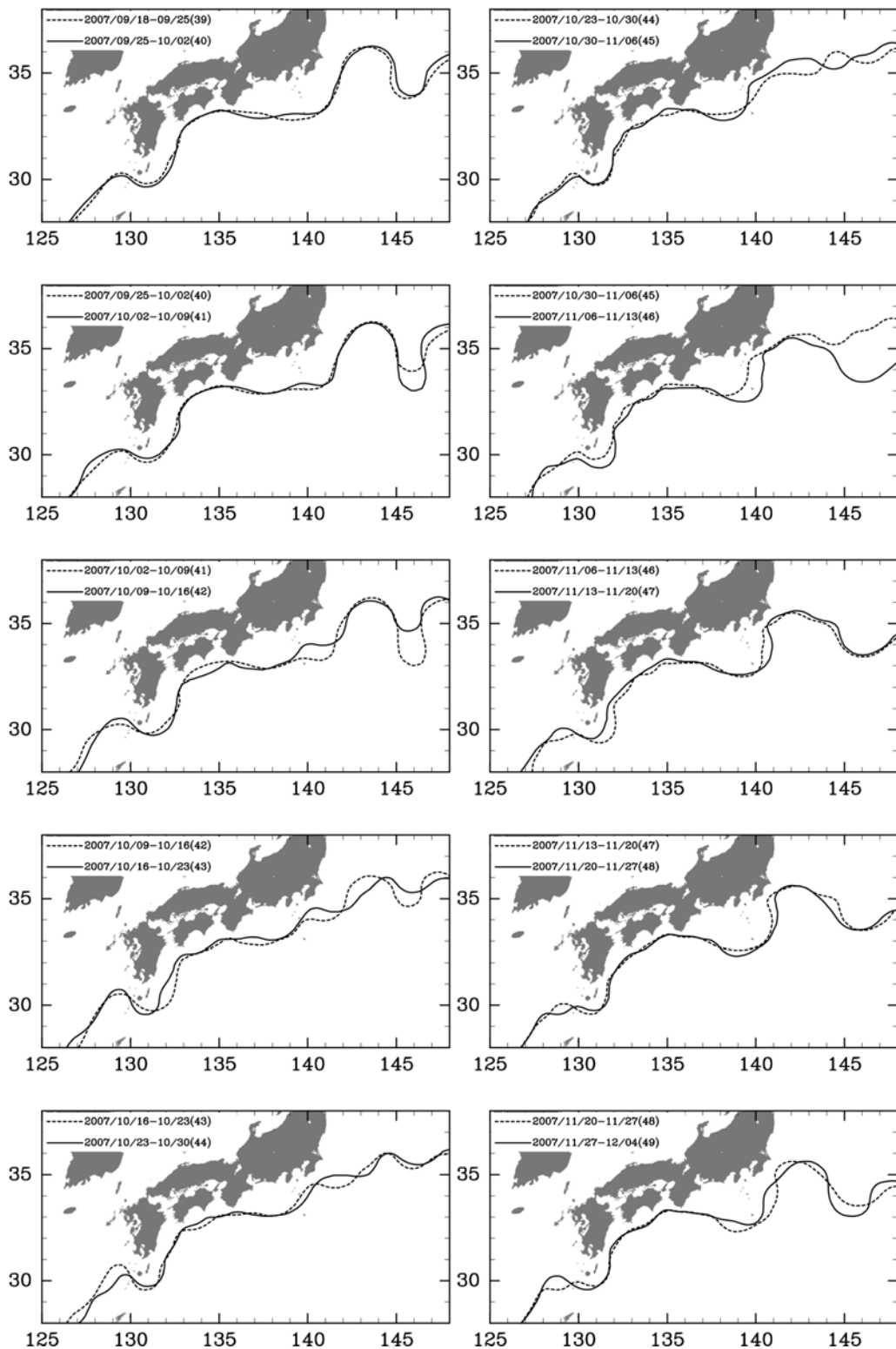


図 2b 黒潮流軸のパターン

(2007年7月~12月, 海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マサバおよびゴマサバ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2008（平成20）年1月～6月）

対象海域：薩南～豊後水道、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～三陸海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい

対象魚群：1歳魚（2007（平成19）年級群）、2歳魚（2006（平成18）年級群）、3歳魚（2005（平成17）年級群）、4歳（2004（平成16）年級群）以上。魚体の大きさは尾叉長で表示。年初に加齢。

1. 薩南～豊後水道（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は、薩南では前年を上回り前々年並み、日向灘～豊後水道では前年を上回る。2歳魚は前年同様低い水準、3歳魚は前年を下回り低い水準。4歳魚は前年を上回る。サバ類全体としては、薩南～日向灘では好調であった前年を下回り、豊後水道では低調であった前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となる。薩南海域では28～31 cm（1歳魚）と35 cm以上（4歳魚）が主体。日向灘～豊後水道では30 cm以下（1歳魚）が主体で35 cm以上（4歳魚主体）が混じる。期前半に26～30 cmのマサバ（1歳魚）が漁獲される。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年同様低い水準。3歳以上は少ない。サバ類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲されるが主に2月以降。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、30 cm以下（1歳魚）が主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年同様低い水準。3歳以上は少ない。サバ類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、30 cm以下（1歳魚）が主体。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバ2歳魚は少ない。3歳魚は多かった前年を下回る。4歳魚は前年を上回る。マサバとしては前年を下回る。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年同様低い水準。3歳魚は前年を下回り低い水準。4歳魚は前年を上回ることが多くない。ゴマサバとしては前年を下回る。サバ類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：マサバは伊豆諸島北部海域が主漁場となる。ゴマサバは期を通じて三宅島周辺海域が主漁場となる。

(3) 魚体：マサバは32～38 cm（4歳魚）が主体となる。ゴマサバは30 cm以下（1歳魚）が主体で、31 cm以上（4歳魚主体）が混じる。

5. 犬吠～三陸海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を下回る。4歳魚は前年を上回る。マサバとしては前年を上回る。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年同様低い水準。3歳魚は前年を下回り低い水準。4歳魚は前年を上回るが少ない。サバ類全体として前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：まき網の漁場は、1～3月は犬吠埼沖周辺、4月以降は常磐南部にも形成される。

(3) 魚体：マサバは28 cm以下の1歳魚が主体となる。32～38 cm（4歳魚）が期後半に混じる。28～32 cm（2歳魚）、30～34 cm（3歳魚）も混じるが少ない。ゴマサバは25 cm前後（1歳魚）と35 cm前後（4歳魚主体）がマサバに混じる程度。

漁況の経過（2007（平成19）年7月～12月）および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マサバ

資源量は1990年以降依然として低い水準にあるが、加入量水準の高い2004年級群の発生により資源量は増加傾向にある。

2003年級群（5歳魚）以上の残存資源量は少ない。

2004年級群（4歳魚）の加入尾数は37億尾と、1992年級群を上回る水準と推定されている。本年7月時点での残存資源尾数は2.7億尾と3歳魚としては近年にない高い水準であったが、その後も漁獲の主体となったことから、残存資源量は減りつつある。

2005年級群（3歳魚）の加入尾数は2.7億尾程度と、加入量水準の低い2001、2003年級群並みの水準と判断されている。本年7月時点での残存資源尾数は5千万尾程度であると推定される。

2006年級群（2歳魚）は、これまでの調査船調査および漁業における漁獲状況がいずれも悪い。本年7月時点で加入尾数は5千万尾程度と評価された。その後の漁獲状況も混獲程度にとどまっており、2005年級群をさらに下回る水準と判断される。

2007年級群（1歳魚）は、黒潮一親潮移行域中層トロール幼魚調査（中央水研・北水研）、北西太平洋中層トロール資源調査（サンマ漁期前調査・東北水研）、釧路水試による流し網調査の結果から高い水準であると考えられた。一方、東北水研による9～10月の三陸～道東～千島沖合海域の中層トロール資源調査（東北水研）では、有漁採集点割合は34.3%と、2002、2004年級群を下回った。茨城県の船曳き網、千葉県の設定網など沿岸域の採集状況は昨年・一昨年より多いものの、2004年には及ばない程度であり、サンマ棒受網への混獲状況も同様であった。12月に入って本格的に漁獲の主体となっており、2002、2004年並に推移している。これらの調査結果から判断される加入量水準は不確実ではあるが、2005、2006年級群を上回り、比較的高い水準と判断される。

マサバの親魚量は2004年級群の高い加入により増加したが、続く2005、2006年級群の加入量水準は低く、2004年級群の残存資源尾数も減少していると考えられ、親魚量は今後減少すると考えられる。2007年級群は、現段階では不確実であるものの比較的高い年級であると期待され、今後のマサバ資源を支える重要な年級群であることは間違いない。親魚量の減少を一時的なものにとどめ、マサバ資源の回復を図るためには、2007年級群の保護が必要である。マサバ太平洋系群の親魚量の回復を目指した資源回復計画は20年度以降の継続が決定している。マサバ資源の回復のため若齢魚保護の努力に期待したい。

(2) ゴマサバ

資源量は1996年級群の高い加入量水準によって増加し、2004年にピークに達した後、2005、2006年級群の加入量水準が低いために減少してきているが依然高い水準にある。

2004年級群（4歳魚）は、近年の卓越年級群である1996年級群（推定加入尾数：17億尾）を上回る推定加入尾数27億尾の卓越年級群であると推定される。前期まで各地漁業の漁獲主体となっており、残存資源量は多くないが4歳魚としては高い水準にあると推定される。

2005年級群（3歳魚）は、推定加入尾数が4億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は低いと判断され、資源尾数は少ない。

2006年級群（2歳魚）は、推定加入尾数が1億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は過去最低水準であると判断され、資源尾数は少ない。

2007年級群（1歳魚）は、7月から12月初めまでの各地漁業の漁獲状況では、まき網、棒受網などで2005、2006年級群の同期を上回って漁獲されており、薩南～豊後水道～宿毛湾、9月以降の紀伊水道～熊野灘、

10月以降の伊豆諸島、11月以降の鹿島～常磐海域では漁獲物の主体となった。道東～三陸海域のサンマ棒受網への0歳魚としての混獲は、2005、2006年級群を上回ったが2004年級群は下回った。調査船調査は、5月の黒潮～親潮移行域中層トロール幼魚調査（中央水研・北水研）および6～7月の北西太平洋中層トロール資源調査（東北水研）では2004年級群と同等あるいは上回る豊度と判断された。しかしながら、その後の6～10月の三陸～道東海域の流し網調査（釧路水試）では、0歳魚の平均CPUEは6.5尾/回であり、過去の同調査の2005年（1.3尾/回）、2006年（0.4尾/回）を上回ったが、2004年（13.9尾/回）および近年では比較的豊度の高かった2002年（29.6尾/回）を下回った。また9～10月の三陸～道東～千島沖合海域の中層トロール資源調査（東北水研）では、出現率・平均CPUEが31.8%・10.9尾/網であった。過去の同調査では2002年級群：53.1%・32.9尾/網、2004年級群：56.4%・23.0尾/網、2005年級群：9.3%・13.2尾/網、および2006年級群：6.8%・5.4尾/網であり、2007年級群は、加入豊度をよく指標すると考えられている出現率が2005、2006年級群を上回ったものの2002、2004年級群を下回り、CPUEも低かった。以上の情報から、2007年級群の加入量水準は2004年級群に及ばないが、2005、2006年級群を上回り、比較的高い水準であると判断される。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) マサバ

1歳魚（2007年級群）の来遊量は、加入量水準が2005、2006年級群を上回ることから、前年1歳魚（2006年級群）を上回ると考えられる。2歳魚（2006年級群）の加入量水準は、前年の2歳魚（2005年級）を下回る水準と考えられ、本予報期間の来遊量は、前年をさらに下回ると考えられる。3歳魚（2005年級群）の加入量水準は2001、2003年級群並の低い水準であり、来遊量は多かった前年3歳魚（2004年級群）を下回ると考えられる。4歳魚（2004年級群）の残存資源尾数は本年7月段階で2.7億尾程度と近年では高い水準にあり、残存資源は減少しつつあると考えられるものの4歳魚の水準としては高く、来遊量は前年4歳魚（2003年級群）を上回ると考えられる。本予報期間は多くは産卵のため房総海域以南へ南下し、たもすくい漁業の対象となる。犬吠～常磐海域には本予報期間の後半（産卵後の北上期）に来遊し、まき網の対象となると考えられる。

常磐海域から犬吠周辺におけるまき網によるサバ類の7～11月の漁獲は、10.1万トン（暫定）と、前年同期（17万トン）を下回った。千葉県以北沿岸の定置網による7～11月のサバ類の水揚量は2.3万トン（暫定）と、前年同期（2.9万トン）を下回ったものの近年の高い水準を維持した。まき網漁場は7月はじめに犬吠～常磐海域で、7月中旬から三陸北部海域で形成された。8～9月は三陸北部海域と常磐～金華山周辺海域、10月は三陸南部～北部海域、11月は常磐～金華山周辺海域、12月は犬吠～常磐海域が中心であった。本予報期間の漁期・漁場は、例年の傾向から犬吠～常磐海域が主漁場となり、1～3月は犬吠埼沖周辺が中心で、4～6月は常磐海域に漁場が広がる。伊豆諸島では北部海域が主漁場となるが、海況次第では南偏する。伊豆諸島より西の海域ではマサバの漁場形成はほとんど期待できない。

7～11月のまき網漁獲物の主体をなした2004年級群の尾叉長は32～38cmであった。本予報期間はこの年級群がたもすくいの主体となり、期後半には犬吠～常磐海域でまき網の漁獲対象となる。2005年級群は30～34cm、2006年級群は28～32cmであるが、これらの年級は来遊量水準が低く、主体とはならない。2007年級群の尾叉長は現在28cm以下（23cmモード）であり、犬吠～常磐海域のまき網の主体となる。なお各年級群の尾叉長幅は広く重なり合っており、厳密な区分は困難である。

(2) ゴマサバ

資源状態の項に前述の通り、1歳魚（2007年級群）はこれまで得られている情報から2004年級群に及ばないが2005、2006年級群を上回る加入量水準と推定され、来遊量は低水準であった前年を上回る。2歳魚

(2006年級群) および3歳魚(2005年級群)は、前期までの漁況でも漁獲は少なく、資源量水準は低いと推定される。来遊量は、2歳魚は前年同様に低い水準、3歳魚は加入豊度の高い前年の3歳魚(2004年級群)と比べることから前年を下回る。4歳魚(2004年級群)は、前期まで各地漁業の漁獲主体となっており、残存資源量は多くないが4歳魚としては高い水準にあると推定され、来遊量は前年を上回る。全体の来遊量は2004年級群主体が多かった前年を下回る。

7～11月のゴマサバ漁況は、紀伊水道以西の各海域では主に0歳魚(2007年級群)を対象に前年および平年をおおむね下回った。熊野灘、伊豆諸島周辺海域では、主に3歳魚(2004年級群)と0歳魚を対象に前年を下回った。犬吠以北海域のまき網では、3歳魚主体で期終盤には0歳魚が主体となってマサバに混獲され、漁獲量は前年を下回った。7～11月の漁獲量は、薩南海域～紀伊水道外域は0.9万トン(前年同期実績2.3万トン)、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は2.2万トン(同4.9万トン)、犬吠以北海域はまき網が3.0万トン(同3.3万トン)、定置網などが0.6万トン(同1.6万トン)であった(漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値)。

各地の漁期・漁場は、薩南海域では1歳魚と4歳魚が、日向灘～熊野灘では1歳魚がそれぞれ主体となって期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、1歳魚主体に4歳魚が混じり、期を通じて近年の主漁場である三宅島周辺海域を中心に漁場が形成される。犬吠以北海域では、1歳魚主体に犬吠埼周辺～常磐南部海域でマサバに混獲される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次の通りである。1歳魚(2007年級群):30cm以下、2、3歳魚(2006、2005年級群):30～35cm、4歳魚(2004年級群):31～39cm。今期の伊豆諸島周辺以北海域の1歳魚は主に22～27cmと例年(20～25cm)より大きい。

マアジ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2008(平成20)年1月～6月)

対象海域:北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業:まき網、定置網

対象魚群:0歳魚(2008(平成20)年級群)、1歳魚(2007(平成19)年級群)、2歳(2006(平成18)年級群)、3歳(2005(平成17)年級群)。年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾(まき網、定置網)

(1) 来遊量:北薩～薩南では前年を下回る。日向灘では不漁の前年並みか前年を下回る。豊後水道西部では前年を下回る。豊後水道東部では前年並み。宿毛湾では前年を上回る。土佐湾では前年を下回る。

(2) 魚体:15～22cm(1歳魚)が主体。期後半には4～12cm(0歳魚)が来遊する。

2. 紀伊水道外域～熊野灘南部(まき網、定置網)

(1) 来遊量:紀伊水道外域西部では前年を下回る。紀伊水道外域東部では前年並み、熊野灘南部では極めて低調の前年を上回る。

(2) 魚体:20～30cm(2、3歳魚)主体。期後半には4～12cm(0歳魚)が来遊する。

3. 熊野灘中北部(まき網、定置網)

(1) 来遊量:1歳魚は前年を上回り、2歳魚は下回る。全体として前年並み。

(2) 魚体:17～28cm(1、2歳魚)主体。期後半には4～12cm(0歳魚)が来遊する。

4. 相模湾(定置網)

(1) 来遊量:前年並み。

(2) 魚体:15～22cm(1歳魚)主体。期を通じて22～26cm(2歳魚)が、後半には4～12cm(0歳魚)が来遊する。

漁況の経過(2007(平成19)年8月～11月)および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

資源量は1986(昭和61)年以降顕著に増大し、1990年代半ばは15万トンから16万トンと高水準であった。しかし1997(平成9)年から減少し、2001(平成13)年に増加したものの、2002(平成14)年には再び減少し、2004(平成16)年にかけてわずかに増加が見られたが、2005(平成17)年以降は減少が続いている。2006(平成18)年の資源量は9万8千トンと中位水準であり、近年の資源動向は減少傾向である。

2005(平成17)年級群(3歳魚)は紀伊水道外域東部で漁獲対象となる。7月以降のこの海域における2歳魚としての漁獲尾数が前年の同齡魚を上回ったので、資源量は前年の同齡魚より多いと考えられる。

2006(平成18)年級群(2歳魚)は紀伊水道外域東部～熊野灘、相模湾で漁獲対象となる。7月以降のこの海域における1歳魚としての漁獲尾数が前年の同齡魚を下回ったので、資源量は前年の同齡魚より少ないと考えられる。

2007(平成19)年級群(1歳魚)は、紀伊水道外域東部を除く海域で漁獲の主体となると考えられる。7月以降の0歳魚の漁獲尾数は前年の同齡魚と比較して、北薩～土佐湾では同程度、熊野灘～相模湾では多かった。

2. 来遊量、漁期・漁場

(1) 北薩～土佐湾：

来遊の主体は2007(平成19)年級群と考えられる。北薩～薩南海域ではこの年級群の漁況が非常に低調であったので来遊量は前年を下回ると予測される。日向灘では翌1～5月の漁獲量と正の相関がみられる4～11月の漁獲量が前年を下回ったので、来遊量は不漁の前年並みか、前年を下回ると予測される。豊後水道では予測期間中の黒潮が接岸傾向で推移して暖水波及がある程度見込まれるので、漁場形成条件は悪くないと予測される。しかし、豊後水道西部ではこの年級群が主体の7～11月の漁獲量が前年を下回って推移したので来遊量は前年を下回ると予測される。東部ではこの年級群の漁獲量が前年を上回ったが、近県の漁況から来遊量は前年並みと予測される。宿毛湾ではこの年級群の漁獲量が前年を上回ったので来遊量は前年を上回ると予測される。土佐湾の定置網の漁獲量は前年を上回ったが低調であったので、来遊量は前年を下回ると考えられる。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘南部：

紀伊水道外域西部では予測期間中の黒潮からの暖水波及がある程度見込まれるために漁場形成条件は悪くないと予測される。しかし、11月以降の漁況が低調であることと近県の漁況の経過から来遊量は前年を下回ると考えられる。東部では2005(平成17)年級群及び2006(平成18)年級群の7月以降の漁況が前年の同齡魚(2歳、1歳)並みであったので、来遊量は前年並みになり、熊野灘南部では7月以降の漁獲量が前年を上回ったので、来遊量は極めて低調の前年を上回ると予測される。

(3) 熊野灘中北部：

7月以降の2006(平成18)年級群の漁獲量は前年の同齡魚(1歳)を下回ったので来遊量は前年を下回り、2007(平成19)年級群は前年の同齡魚(0歳)を上回ったので来遊量は前年を上回る。全体として前年並みと予測される。

(4) 相模湾：

7月以降の2006(平成18)年級群及び2007(平成19)年級群は前年の同齡魚(1歳、0歳)を上回った。また、近年の漁獲量は安定している。これらのことから、来遊量は前年並みになると予測される。

2008(平成20)年級群の来遊水準の予測は産卵期前のため現状では困難であるが、例年の傾向から予測期間後半に来遊すると考えられる。

マイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2008(平成20)年1月～6月)

対象海域:北薩～道東

対象漁業:まき網、定置網、船曳網

対象魚群:0歳魚(2008(平成20)年級群)、1歳魚(2007(平成19)年級群)、2歳魚(2006(平成18)年級群)並びに3歳魚(2005(平成17)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量:前年を上回るか前年並み。熊野灘では依然低水準。

(2) 漁期・漁場:期を通じて漁獲される。

(3) 魚体:16～22cm(1歳魚主体で2歳魚が混じる)。後半には14cm以下(0歳魚)が加わる。

2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量:低水準であり、伊勢・三河湾、駿河湾では前年並み。相模湾では前年を下回る。

(2) 漁期・漁場:期を通じて散発的に漁獲される。

(3) 魚体:15～19cm(1歳魚)主体。

3. 房総～道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量:1歳魚のまとまった来遊は6月以降であり、2歳魚以上の来遊量は前年を下回ることから、全体として前年を下回る。特に1～3月はカタクチイワシへの混獲が主体となる。

(2) 漁期・漁場:1～3月には常磐南部～犬吠埼沖、4～6月には犬吠埼沖～鹿島灘に漁場が形成される。仙台湾以北の定置網は5月以降。三陸・道東での漁場形成は無い。

(3) 魚体:1～3月は19～22cm(2歳魚と3歳魚)並びに12～15cm(1歳魚)。4～6月には15～17cm(1歳魚)が主体になる。

漁況の経過(2007(平成19)年8月～11月)および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は1994(平成6)年に100万トンを下回り、その後1999(平成11)年までは70万～90万トン台で推移したが、その後再び減少傾向となった。2002(平成14)年以降は10万トン台の低水準にあると推定された。近年の動向としては横ばいである。

2005(平成17)年級群は、1歳魚として2006(平成18)年6～8月、2歳魚として2007(平成19)年1～3月の房総～鹿島灘海域における活発な漁獲の主体となった。資源量水準としては、前後の年級群を上回っていたが、2007(平成19)年夏季以降の漁況は低水準であり、今期の3歳魚としての資源量水準は低いと判断される。

2006(平成18)年級群は、1歳魚として、2007(平成19)年2月の未成魚越冬群調査(俊鷹丸・中央水研)での分布密度は前年を大きく下回った。その後6～7月の表中層トロール調査(北鳳丸と青海丸・東北水研)、6～9月の間に実施された表層流網調査(北辰丸・釧路水試)、9～10月の表中層トロール調査(北鳳丸・東北水研)でも、沖合域における分布密度は低かった。さらに、前期においては、昨年同期のような1歳魚の好漁が見られなかったことから、今期の2歳魚としての資源量水準は前年を下回ると判断される。

2007（平成19）年級群は、2007（平成19）年5月の幼稚魚調査（北鳳丸・中央水研）での加入量指数が29であり、2005（平成17）年（28）と同程度であった。その後6～7月に行われた表中層トロール調査（北鳳丸と青海丸・東北水研）でも、2005（平成17）年と同程度の分布量が認められた。2007（平成19）年11月までの北薩～紀伊水道外域における0歳魚主体の漁況は好調に推移した。一方、6～9月の間に実施された表層流網調査（北辰丸・釧路水試）、7～9月並びに9～10月の表中層トロール調査（第2期北西太平洋鯨類捕獲調査・日鯨研/遠洋水研）並びに9～10月の表中層トロール調査（北鳳丸・東北水研）では、沖合域における分布密度は低いと推察された。これらのことから、2007（平成19）年級群の加入量水準は、低水準ながら比較的加入量が多かった2005（平成17）年級群と同程度と考えられるものの、沖合域における分布密度は高くないと考えられる。ただし、2005（平成17）年級群のように、今後房総以北海域でも漁況が好転する可能性がある。今後の房総・常磐沖における未成魚越冬群の漁獲動向や、これを対象とした表中層トロール調査（俊鷹丸・中央水研）等の結果により判断していくこととする。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘：

前期（8～11月）の主要水揚量は前年同期比約3倍となった。体長組成の推移等から、0歳魚（13～16cm）主体で漁獲されたと見られる。この来遊量水準は、近年の低水準の中では高く、今期（1～6月）も、引き続き1歳魚として漁獲されると考えられる。黒潮は今期前半において都井岬～潮岬で接岸基調と予測されていることから、潮岬以西の各漁場域への来遊条件も悪くなく、これらの海域では期を通じて漁獲されることが期待される。一方、熊野灘においては、散発的な来遊が予測される。漁獲の主体は1歳魚で、これに2歳魚が混じる程度（16～22cm）と考えられる。例年の傾向では、今期後半には0歳魚（14cm以下）が加わる。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾：

前期（8～11月）の主要水揚量は前年同期を上回ったが、依然低水準であった。体長組成の推移等から、0歳魚（17cm未満）主体で漁獲されたと見られる。この来遊量水準は、前年の0歳魚は上回るものの低水準と考えられる。今期（1～6月）の1歳魚としての来遊量も低水準であり、漁況は散発的に推移すると考えられる。漁獲の主体は1歳魚（15～19cm）と考えられる。

(3) 房総～道東：

前期（8～11月）の主要水揚量は、前年同期を下回り、2004（平成16）年同期と同程度であった。7月上中旬に常磐北部～房総海域に形成されたまき網漁場は、8月以降は常磐北部中心で散発的となり、分布密度も低下した。体長組成の推移等から、前半は1歳魚（16～20cm）と2歳魚（19～22cm）主体で、後半から0歳魚（13～14cm）も漁獲された。2005（平成17）年級群の残存資源量が少ないことと、2006（平成18）年級群の来遊量水準は2005（平成17）年級群を下回ると考えられることから、今期（1～6月）における2歳魚以上の来遊量水準は前年同期を下回ると考えられる。特に1～3月は、カタクチイワシへの混獲が主体となると予測される。なお、今期における1歳魚のまとまった来遊は6月以降と考えられる。漁場は、近年の傾向から、1～3月には常磐南部～犬吠埼沖、4～6月には犬吠埼沖～鹿島灘に形成されると考えられる。また、仙台湾以北の定置網の漁期は5月以降であり、三陸・道東での今期の漁場形成は無いと考えられる。1～3月の漁獲の主体は、2・3歳魚（19～22cm）と1歳魚（12～15cm）である。4～6月には15～17cmに成長した1歳魚が主体になると考えられる。

カタクチイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し (2008(平成 20)年 1 月～6 月)

対象海域：北薩～道東。

対象漁業：まき網、定置網、船曳網。

対象魚群：0 歳魚(2008(平成 20)年級群)、1 歳魚(2007(平成 19)年級群)、および 2 歳魚(2006(平成 18)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～紀伊水道外域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩・薩南および日向灘では前年を下回る。豊後水道では前年並みか前年を上回る。土佐湾から紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：12cm 以上の 2 歳魚は少なく、12cm 以下の 1 歳魚主体。

2. 熊野灘～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：熊野灘～駿河湾では前年を下回る。相模湾では前年並み。

(2) 漁期・漁場：伊勢・三河湾、渥美外海では 5 月以降。熊野灘、駿河湾では全期間。相模湾は 3 月以降中心。

(3) 魚体：12cm 以上の 2 歳魚は少なく、12cm 以下の 1 歳魚主体。

3. 房総～道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量：常磐・房総は前年を下回る。三陸の定置網は前年を上回る。道東の定置網は混獲程度。

(2) 漁期・漁場：1 歳魚まき漁場は 1 月は常磐南部から犬吠埼沖、2 月以降は鹿島灘から房総海域。三陸の定置網は 1 月までと 5 月以降。

(3) 魚体：1 月は 12～13cm 台の 2 歳魚と 9～12cm 台の 1 歳魚。2 月以降は 9～12cm 台の 1 歳魚主体。

漁況の経過(2007(平成 19)年 8 月～11 月)および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量推定値は 1998(平成 10)年から 2006(平成 18)年まで 90 万～150 万トンで推移している。水準は過去 20 年では高位、経過は 5 年間で減少傾向にある。本系群は漁場が形成される沿岸だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布している。

2006(平成 18)年級群は、2007 年 6～7 月の北西太平洋におけるトロール調査で 10cm 以上のカタクチイワシの分布量が 2001 年以降で最低であったこと、2007 年秋季の道東まき網が不漁であったこと等から、近年の中では低水準であると考えられる。

2007(平成 19)年級群は、紀伊水道を除く太平洋岸の各地において 1～6 月のシラス漁が好調であったこと、6～7 月の北西太平洋におけるトロール調査で 10cm 未満の未成魚の分布量が 2001 年以降で最高であったこと、道東で夏季に 0 歳魚としての来遊量が多かったことから、高い資源水準にあると考えられた。一方、9～10 月の表中層トロール調査による 0 歳魚の採集状況、および 0 歳魚を主対象とする房総の 2 歳魚まきの漁況は、2005(平成 17)年級群(中水準)が 0 歳魚であった

2005 年の状況と類似していた。以上の漁況および調査結果から、2006(平成 18)年級群を上回り、近年の中では中～高水準であると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～紀伊水道外域(まき網、定置網)

北薩および薩南海域では、周辺海域でのバッチ網漁業によるシラス漁が低調であることから、前年を下回り過去 5 年平均並みと考えられる。日向灘では、2 歳魚(2006(平成 18)年級群)が低水準であることから体長 12cm 以上の大羽の来遊が見込めないため、前年を下回ると予測される。豊後水道では 1 歳魚(2007(平成 19)年級群)の漁獲が好調であるため、来遊量は前年並みか前年を上回ると予測される。土佐湾から紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲は無い。

(2) 熊野灘～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

熊野灘では、黒潮流路の予測が魚群の南下を妨げる型ではないが、2 歳魚(2006(平成 18)年級群)が低水準であることから体長 12cm 以上の大羽の来遊が見込めないため、前年を下回ると予測される。伊勢・三河湾および渥美外海では、夏秋季のシラス漁獲量と翌年 1～6 月の成魚・未成魚の漁獲量との間にある程度の相関関係があり、2007 年夏～秋のシラス漁獲量が最近 10 年で最も少なかったことから前年を下回ると予測される。駿河湾では 2007 年夏以降の中型まき網の漁況から前年を下回ると考えられる。相模湾では、10 月以降の伊豆東岸定置網の漁獲量が前年を上回っているものの、10 月以降のシラス、および未成魚が低調であるため、前年並みと予測される。

(3) 房総～道東(まき網、定置網)

2006(平成 18)年級群は近年の中では低水準、2007(平成 19)年級群は中～高水準にあると推定される。常磐・房総海域では、例年なら 12～1 月に漁獲の主体となる 2 歳魚(2006(平成 18)年級群)が低水準であることから、1 月までの漁況は低調となる。一方、1 歳魚(2007(平成 19)年級群)は中～高水準であると推定されることから、1 歳魚の来遊が見込まれる 2 月以降の漁況は上向く。予測期間を通して見ると、前年期の 2 歳魚(2005(平成 17)年級群)より今期の 2 歳魚(2006(平成 18)年級群)の資源量が明らかに少ないため、成魚大型群の不漁がひびき、総じて前年を下回ると予測される。

三陸の定置網では 1 歳魚(2007(平成 19)年級群)が漁獲の主体で、今期の 1 歳魚(2007(平成 19)年級群)の資源量は前年期の 1 歳魚(2006(平成 18)年級群)より多いことから前年を上回ると予測される。

ウルメイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2008(平成20)年1月～6月)

対象海域:北薩～熊野灘

対象漁業:まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群:0歳魚(2007(平成19)年秋～2008(平成20)年生まれ)及び1歳魚(2007(平成19)年夏以前生まれ)。魚体は被鱗体長。

- (1) 来遊量:北薩～薩南では好漁の前年並みで、過去5年平均を上回る。日向灘では前年を上回る。豊後水道では前年並みか前年を上回る。宿毛湾～土佐湾は前年並みか前年を下回る。紀伊水道外域西部では前年並み。紀伊水道外域東部～熊野灘南部では前年及び過去10年平均を上回る。熊野灘中北部では前年を上回る。
- (2) 漁期:土佐湾の多鈎釣は4月まで。他は全期間。
- (3) 魚体:16～23cm(前年夏まで生まれ)が主体。4月以降は14cm以下(前年秋～当年生まれ)も来遊する。

漁況の経過(2007(平成19)年8月～11月)および見通しについての説明

1. 資源状態

資源量の指標となる産卵量が過去22年で最多であるので、資源水準は高位、動向は最近5年の推移から増加傾向にある。茨城県海域では例年になく漁獲された。現在の漁獲は資源に大きな影響を与えていないと考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場

北薩～薩南では0歳魚が好漁であったので好漁の前年並みと予測される。日向灘では9～12月の漁獲量と翌年1～6月漁獲量には正の相関がみられ、2007(平成19)年9～12月は前年を大きく上回ったので、前年を上回ると予測される。豊後水道西部でも同様に5～11月と翌年1～6月の漁獲量に比較的高い正の相関がみられ、2007(平成19)年5～11月の漁獲量が好漁の前年並みで、1～6月の推定漁獲量は前年を上回る。豊後水道東部でも8～11月の漁獲量は前年を上回った。したがって、豊後水道では前年並みか前年を上回ると予測される。宿毛湾～土佐湾では漁獲量が前年を下回ったので、前年並みか前年を下回ると予測される。紀伊水道外域西部では前年を下回ったが、系群全体の水準から判断して前年並みと予測される。紀伊水道外域東部～熊野灘南部では漁獲量が前年及び過去10年平均を上回ったので前年および過去10年平均を上回ると予測される。熊野灘中北部では漁獲量が10月まで前年を大きく上回って推移したので前年を上回ると予測される。なお、熊野灘中北部では1～6月は他魚種への混獲が主体となる。また、豊後水道沖～潮岬紀伊水道外域～熊野灘への来遊条件は悪くないと予測される。

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	愛媛県中予水産試験場
青森県水産総合研究センター	愛媛県水産試験場
岩手県水産技術センター	大分県農林水産研究センター 水産試験場
宮城県水産研究開発センター	宮崎県水産試験場
福島県水産試験場	鹿児島県水産技術開発センター
茨城県水産試験場	大阪府環境農林水産総合研究所 水産技術センター
千葉県水産総合研究センター	香川県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
東京都島しょ農林水産総合センター 大島事業所 八丈事業所	財団法人 日本鯨類研究所
神奈川県水産技術センター	気象庁 地球環境・海洋部 海洋気象情報室
神奈川県水産技術センター 相模湾試験場	海上保安庁 海洋情報部 環境調査課
静岡県水産技術研究所	関東農政局 統計部
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	茨城農政事務所 統計部
三重県科学技術振興センター 水産研究部	水産庁
和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 本部 業務企画部 北海道区水産研究所 東北区水産研究所 中央水産研究所
徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究所	
高知県水産試験場	